

平成二十四年六月一日発行 第二十二巻第六号 通巻第百二十五号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐 かい

岡井省二創刊

平成 24年6月号



剪定

高橋将夫

御仏の顔はそもそも春の顔
鳥の世は男がかくも囁れる
矯声の後しとやかにチューリップ
春昼や思ひ出消ゆる感熱紙

おほいなる夢の花種蒔きにけり
花びらが亀の甲羅で運ばるる
百の目で見てゐるごとし豆の花
制空権カイトと競ひあふ和風
亀の鳴く悠々自適の道なりし
しやぼんだま虹にならうとして消ゆる
おほまかな剪定にして狂ひなし

槐安集

水野恒彦

初蝶の結界を抜け人臭し
春分の大樹の洞うらを覗き見る
温顔曾八田木悦記の桜隠しとなりける
おもしろの世に遊びゐて椿山
春蘭の透明な蜜あふれをり

延広禎一

折鶴の羽根拵おとげたる卒業期
海底も啓蟄のんどですと魚信あり
喉のんどはや宝楽焼の桜鯛
涛越たうこしに遠見の富士を北斎忌
『和紙』操るや涅槃ねはんの雪となりける



加藤みき

牡丹の芽長鳴き鳥のとさかかな
春深し傘寿の祝忘れをり
白酔の眼にみたび春の山
雪ねぶり土くろぐると弛びたる
春潮に日ざしあまねし納骨す

石脇みはる

沖を遠くに菜の花と桃の花
文字めきしシラスウナギの眼かな
竹林の奥処に春の光あり
彼岸会や朝の日差しのやはらかに
煮びたしの土筆盛られし赤絵皿

中島陽華

春愁のピノキオの鼻戸とがくし隠山へ
春の闇パズルを解いてをりにけり
参禅に凝る相撲取山笑ふ
炭俵出茶屋に笑顔生まれけり
剪定や箱入り息子崑崙へ

栗栖恵通子

花吹雪一對ながき千手仏
包丁の峰で叩いて花の雲
初蝶の羽ほどかろし漆仏
訪ひたるは中千本の恋桜
なんやねん鶯餅の粉つけて

竹内悦子

蛇と亀三井に交むや水の神
機械油こぼれてゐたる春の闇
四時頃の焼はまぐりと白い月
無量寿といふ蕎麦のあり燕来る
花衣夜は法事の末席に

大島翠木

梅満開西には水の迅き沢
涅槃西風通り過ぎたる體かな
法螺貝や馬鹿や春夢のわたつみ
原発や玉葱ごろごろ芽を吹いた
節々の竹の空気や三鬼の忌

雨村敏子

葬送棺キクエ様の列風花の煌めける
和紙に書く墨の滲みや桃の花
亀鳴くか雨夜の二日続く朝
沖を向く流し女雛の凜として
下萌の地熱伝はる胸の奥

近藤喜子

光りたき水のありたる春田かな
晴れし夜は星になりさう花すみれ
鎮魂の白さよ花のこゑかとも
晩年の父きらきらす花吹雪
たましひの乗りぬる桜流しかな

本多俊子

眼動かず何思ふ春の鹿
梅真白梅の色して姉の骨
さくらいろてふしずかなる桜かな
笹原の笹の葉鳴つて忘れ霜
亀鳴くや夕日は青き匂ひして

谷村幸子

普茶料理になごむひと時桃の花
土筆つみの約束またず逝きし友
ゆくりなく友の冥福祈る春
早々と土筆をつみて供えけり
読み返す遺句集「和紙」や花の雨

瀬川公馨

何ンもない空くらに魔弾や花ミモザ
雲舐めて死者に口なし野梅咲く
海も陸も穀雨のまつ最中
菜の花の一角てんねんちぢれつ毛
三月の水辺を覗くトムソーヤ

久保東海司

紙雛の眼もとは母に似て画かれ
花冷えや夕星うるむ喪に服す
蟹の脚ほじくり啜り酌みぬたり
川辺りの桜こまごま光りつつ
水仙の花いよよ葉に反り咲きて

西村純太

竹の秋道に迷うて日の昏れて
陽炎やきのふもけふも糸電話
死者ねむる天空の間てふ春日影
朧夜や影を踏み合ふ死者生者
山藤のゆれて真如のこゑを聴く

中野京子

色光 匂 空 間 北 開 く
水仙香へやいつぱいの朝日かな
瓶詰の砂漠の風の光なり
ふらここに己が命のゆれてをり
桃の酒ひと日の重さとけてゆき

槐市集

岩下芳子

春光の大窓 第一講座室

払へども人なつかしく春の蠅
大淀に小舟出したる蜩採
黒黒と田の土動く春の雨
三月の琵琶湖を開く黄金の鍵

岩月優美子

北窓を開け次の世の明るさに
青き踏むけふを忘れず少年よ
春風に揺れる樹々にニンフ生る
茎立やピサの斜塔を支ふべく
天地のあはひに魂の陽炎へる

江島照美

金瘡小草すべての悪に蓋をせむ
黙の中少し距離置く春炬燵
遊ばれて遊ぶ喜びバレンタイン
大試験知恵の輪くぐる祈りかな
ぽつぽつと朽つる築地ついちに落椿

熊川暁子

梅日和空気みたいな夫帰る
白梅に系図ひもとく女かな
夜はときに雛のこゑあり恙なし
伊勢道の通りすがりに見る雛
金平糖掌よりこぼるる春の色



槐集

高橋将夫選

岩下藤子選

踏青の似合ふ出立ちなりしかな
奪はれぬものが故郷鳥雲に
修二会果て天の岩屋戸軽くなり
魚島や浪速の空をもち上ぐる
とおちやんのすきな色やで犬ふぐり
一切を杖に込めたる遍路かな
逆を打つ人と行き交ふ遍路道
末黒野の大きいなる土育めり
天地の目を細めたる春の雨
堤細く土筆丸丸出でにけり
天赦日春着選んでをりにけり
佐保姫の蹴出しにつきし鳥の羽
懸想文売りと目が合ふ百万遍
そそらるる菜飯の色や御本手碗
まつたりと葛餡はらる蕪むし

守口 柳川 晋

岩下 芳子

枚方 近藤 紀子

薄氷を突いてカオス始まりぬ
三寒の触手を空へ大樗
春一番飛ばされさうな昼の月
火の粉撒き春呼ぶ韋駄天走りかな
群れ鳥の頭より突込む大霞
神の田をしばらく打つや春霞
ジャンプ台春を動かす少女かな
壮年のピカソ跳のダンスかな
六甲やカノンのやうに山笑ふ
啓蟄や黒真珠抱くあこや貝
なんでやねんなんぞ早よ逝く春の雁
渡月橋誰と渡るや朧の夜
一遍や吹かれしもののみな温し
蛸薬師寺横丁の北窓開いてをり
気にかかる鸚鵡の言葉山笑ふ

枚方 熊川 暁子

谷岡 尚美

京都 竹中 一花

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

踏青の似合ふ出立ちなりしかな 柳川 晋
三月十一日に槐安集同人の近藤さくえさんが他界された。春は名みの寒さだったが、遺影の笑顔は踏青の爽やかさに包まれていた。ご冥福を心より祈りたい。

〈奪はれぬものが故郷鳥雲に〉の句によれば、何物も、たとえ震災でも故郷は奪えないという。きっと元の故郷が甦ると信じた。

〈修二会果て天岩屋戸軽くなり〉の句によれば、修二会で岩屋の戸が軽くなったという。実に軽妙。

一切を杖に込めたる遍路かな 岩下 芳子
同行二人で行く遍路の手甲・脚絆、菅笠、数珠、金剛杖。杖には遍路の思いがしかと込められている。

〈未黒野の大いなる土育めり〉〈天地の目を細めたる春の雨〉の句もおおらかに大自然を見つめていて好感がもてる。

佐保姫の蹴出しにつきし鳥の羽 近藤 紀子
佐保姫の蹴出しについた鳥の羽。春のやわらかさが伝わってくる一句。女らしい作者の心の風景。

薄水を突いてカオス始まりぬ 熊川 暁子
薄水を突けば割れて、バラバラに動いて、やがて納まる。秩

序が破れて混沌に。コスモスからカオスにといったところ。

ジャンプ台春を動かす少女かな 谷岡 尚美
スキートのジャンプ台から飛び立った少女。天地が動いて、春が動いたと作者は感じた。スキートのジャンプ界に現れた新星のまばゆいジャンプを詠んだのであろう。

気にかかる鸚鵡の言葉山笑ふ 竹中 一花
鸚鵡が片言で何か言っている。私を馬鹿にしているのではないだろうか。よく分からないだけに、大いに気になるところ。

梟に導かれゆく久遠かな 前田美恵子
梟は古代ギリシャでは女神アテナの従者で、「森の賢者」と称されるなど、知恵の象徴とされている。そんな梟に久遠に導かれて行くと言う。梟は省二先生なのかもしれない。

春風 春風 春風
春風に聞耳を立て弥勒佛 中田 禎子
春風に聞耳を立て弥勒佛。本当におだやかな春の雰囲気。

春光や人も草木も饒舌に 岩月優美子
春が来て若草が萌え、あちこちで風がそよぐ。なるほど、気分が高揚して知らず知らず饒舌になっている。

炎より天へと登る龍の生る 江島 照美
「龍天に登る」の季語が雄大に詠み込まれている。
〈飼主も同じ顔なり春の昼〉では、ペットが飼主に似ているのではなく、飼主がペットに似ていると捉えた視点がユニーク。
(以下略)